

令和元年6月17日現在

機関番号：17501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K20765

研究課題名(和文) 長期入院患者の自殺予防を踏まえた退院支援における精神科看護師教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Psychiatric nursing education programs for discharge support to prevent post-discharge suicide of long-term hospitalized patients

研究代表者

岩本 祐一 (Iwamoto, Yuichi)

大分大学・医学部・講師

研究者番号：00734659

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、慢性期統合失調症患者の自殺予防を踏まえた退院支援における看護ケアガイドライン、さらには教育プログラムの開発を目指した。統合失調症患者の自殺を経験した精神科看護師から得られた質的データから、慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な視点を抽出した。また、精神科看護師が常に、慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な視点をもつことの重要性が示唆された。本研究では、看護ケアガイドライン作成のために必要な視pointsの抽出と試案の作成までとなったため、今後、ケアガイドラインの完成、さらには有効性を確認していく必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神科看護師が看護ケアガイドラインを用いることで、長期入院に至る統合失調症患者の退院支援時の際、自殺予防の視点を踏まえた看護介入が期待できる。統合失調症患者の自殺者の罹患率が10年を越えていることから、この看護介入が長期入院に至る精神障がい者の退院支援を推し進め、日本の精神医療の大きな課題である精神科長期入院患者の退院支援の促進に貢献できるという点において意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In the present study, we aimed to develop nursing care guidelines and education programs for discharge support to prevent post-discharge suicide in patients with chronic-phase schizophrenia. We determined the necessary indicators for identifying the post-discharge suicide risk in patients with chronic-phase schizophrenia by analyzing the qualitative data obtained from the psychiatric nurses who experienced the suicide of schizophrenia patients. We found that it is crucial for the psychiatric nurses to constantly assess the post-discharge suicide risk in schizophrenia patients. We were only able to derive a set of necessary indicators and a draft of nursing care guidelines. Future studies are warranted to complete the nursing care guidelines and verify their effectiveness.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神科看護師 慢性期統合失調症 自殺

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の精神保健医療福祉施策は「入院医療中心から地域生活中心へ」と移行し、精神科領域における社会的入院患者の地域への移行、国民の精神健康の保持増進が進められている。ところが、精神疾患をもつ患者の平均在院日数は依然として長期に及び、退院促進はそれほど積極的に進んでいるとは言い難い(厚生労働省、2014)。精神看護領域における退院支援上の課題として、藤野ら(2007)は、精神科長期入院患者が「孤独への脅威」、「精神障害を抱えて生活する苦悩」、「社会適応能力の低下から生じる生活の困難性」、「実存性が脅かされることへの不安」、「自己受容性の低下に伴う苦悩」という苦悩や脅威を感じているとし、上野(1999)は、加齢によって日常生活行動能力が低下していること、奥村ら(2005)は、社会資源や家族との関係など患者の抱える問題だけではなく周囲が抱える現状が存在すること、さらに岩本(2017)は、支援する側の看護者がケア上の困難さや課題を抱えていることを報告している。入院医療中心から地域生活中心への移行には、社会復帰施設の整備や支援体制の整備が不可欠であることは言うまでもないが、同時に退院支援上の課題についても取り組む必要があり、日々患者と向き合っている精神科に勤務する看護師(以下、精神科看護師)はこれらの課題に直面していると考えられる。

精神科入院患者のうち最も多くの割合を占めるのは統合失調症患者であり(患者調査、2017)、精神障がい者の地域生活への移行を推し進めるためには、統合失調症患者の退院促進が必要不可欠である。統合失調症患者の退院支援を阻む要因は様々であるが、その一つに入院中の自殺があり(池淵ら、2008)、統合失調症患者は入院中に自殺率が高まるとの報告も見られる(Balharra & Verma、2012)。さらに、自殺に至った統合失調症患者の入院期間が5年以上、罹患期間でみると平均で15.6年と長期であることから(上平、2012)、自殺の問題は急性症状を呈している患者だけでなく慢性期にある統合失調症患者(以下、慢性期統合失調症患者)の問題でもあることがわかる。

よって本研究ではまず、精神科病棟に長期入院している慢性期統合失調症患者の自殺に関連する実態調査を行い、実際にはどのような看護介入がなされているのかを明らかにした上で、精神科看護師が退院支援と平行しながらいかにして自殺を予防していくべきなのかを示すケアガイドラインを作成する。そして、この研究が退院支援における精神科看護教育プログラム作成のための基礎的研究となると考える。

2. 研究の目的

本研究では、看護ケアガイドラインを作成する前段階として、慢性期統合失調症患者の退院支援において、精神科看護師がもつべき自殺のリスク判断に必要な視点を明確化することを目的とした。その後、その視点を踏まえたケアガイドラインの開発、そして将来的に、看護教育プログラムの構築を目指す。

3. 研究の方法

研究協力が得られた対象者に、自殺の予測が困難だった慢性期統合失調症患者と自殺のリスク判断に必要な視点に繋がる内容について、インタビューガイドを基に半構成的面接調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 対象者の概要

対象者は研究の同意が得られた民間3施設の単科の精神科病院に勤務する精神科看護師であり、男性2名、女性8名の計10名であった。平均年齢は51歳(33~63歳、SD=8.4)、看護師としての平均臨床経験年数は22.6年(10年~38年、SD=9.2)であった。精神科看護師としての平均臨床経験年数は17.8年(1年~38年、SD=11.9)であった。

(2) 慢性統合失調症患者の自殺を経験した精神科看護師が考える慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断に必要な視点

【潜在化した精神症状】への視点

本研究で語られた慢性期統合失調症患者の自殺についての事例は、いずれも精神科看護師にとって、自殺の予測が困難なケースであった。精神症状が表面化しない場合、そのことが自殺の予測の困難さに繋がる大きな要因であることが考えられた。また、慢性期統合失調症患者は、自分なりに症状と折り合いをつけて疾患と共存しているとされ(石井ら、2016)、その結果、症状の慢性化と潜在化に繋がり、自殺のリスクが潜在化すると考える。さらに本研究においては、意図的に精神症状が隠されることによる自殺のリスクの潜在化の可能性が示唆された。精神疾患を有する自殺未遂者は主治医やその他の医療者への自殺念慮に関する本音を表出しない傾向にあり(長田ら、2013)、臨床場面において防ぎえなかった自殺の多くは、医療者が患者の「隠された自殺念慮」に気づけなかったことにより生じるとされる(松本、2016)。このことから、慢性期統合失調症患者に関わる精神科看護師が【潜在化した精神症状】への視点をもつことで、慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断が可能になると考えられた。

【精神運動興奮への移行】

慢性期にある統合失調症患者の病態について、佐藤(1989)は、発作性、挿話性症状の体験内

容を構成するものに自殺傾向、攻撃破壊衝動があり、動機がはっきりしない衝動的な自殺企図や暴力行為が出現することがあると述べている。また、攻撃性や暴力行為は精神科の長期入院による患者のホスピタリズムにも影響を受けるとされている(安永、2009)。対象者がケアを提供していた患者においても、長期入院によるホスピタリズムが精神運動興奮に影響を与え、結果的に自殺行為に繋がった可能性は否定できない。対象者の「患者の言動が普段とは違い、何かおかしいと感じながらも、自殺に至るとは考えなかった」という語りからも、長期入院によるホスピタリズムが精神運動興奮を引き起こし、自殺のリスクが高まるという認識が希薄だったことが伺えた。このように、長期入院によるホスピタリズムが及ぼす慢性期統合失調症患者の【精神運動興奮への移行】への視点を精神科看護師がもつことで、慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断が可能になると考えられた。

【患者の特有な感覚】への視点

本研究の対象者が経験した慢性期統合失調症患者の自殺の一つの特徴として、“自身の存在を示したい”という精神科看護師にとっては想定困難な患者の感覚が自殺行為に影響した可能性が示唆された。國方ら(2006)は、統合失調症患者の精神症状は自損感情に影響を及ぼすとしており、対象者が介入していた患者は、低下する自尊心をなんとか維持しようという葛藤した結果、自身の存在を他者に示すという目的を達成するための方法として、《自殺という行為による自身の存在のアピール》に至ったことが考えられた。このように、自殺に至る慢性期統合失調症患者の感覚は援助者側の想定を超える場合があることを常に意識する必要があると考える。

さらに本研究では、「退院」に対する患者-看護師間の感覚の違いが、患者の自殺のリスク判断を困難にしていることが考えられた。萩野(2010)は長期入院に至る精神障害者は退院を希望しながらも不安を抱くという両価的な思いを抱くとし、吉村(2013)は、退院に向けての計画や介入は、時に患者に緊張や不安を与えることにも繋がり、退院支援を推し進めることは容易ではないとしている。対象者がケアを提供していた患者においては、「(周囲から)置いていかれる」という患者独自の感覚を抱いたが、対象者の「退院支援を推し進める際に、患者の退院に対して抱く感覚の理解が不十分だった」という語りからも、患者独自の感覚を精神科看護師が想定することが困難だったこと、さらには、この患者-看護師間の感覚の違いが、患者の自殺の予測を困難にしていることが示唆された。このように、精神科看護師が常に【患者の特有な感覚】への視点をもつことで、慢性期統合失調症患者の自殺のリスク判断が可能になると考えられた。

【患者-看護師関係の長期化に伴う影響】への視点

慢性期統合失調症患者の自殺のリスクの潜在化には、病状の慢性化や、長期間にわたる入院生活の影響も否定できない。長期入院生活の影響に関して、上野ら(2005)は、長期入院している患者はすでに施設症となっており、一旦この状態に陥った統合失調症患者は自我機能の低下もあり、退院への意欲と希望が薄れてくることがあるとしている。対象者がケアを提供していた患者が施設症の状態であったかは定かではないが、症状の慢性化に伴い、患者の状態の変化の把握に困難さを感じていた。このことは、慢性期統合失調症患者の入院の長期化により、精神科看護師にとって患者の存在感が薄まり、それに伴い次第に長期入院に対する違和感が薄れていく現象(石川ら、2013)が影響していると考えられる。山本ら(2017)は、長期入院中の統合失調症患者を取り巻く療養環境について、医療者が決定した規則に則って療養環境が管理されることを述べており、木村ら(2010)は、精神科看護師は業務に従事するうちに、身体抑制に関して、病状により必要であると感じるようになり、これは時間の経過による慣れから生じると述べている。本研究においても、患者が隔離室に入室しているという状況に対象者が「(隔離室に入室していれば)大丈夫だろう」という《療養環境に対する看護師の肯定的な考え》を抱いたことで、自殺のリスクが精神科看護師にとって潜在化してしまったことが考えられた。これらのことから、日々の関わりにおいて精神科看護師が常に【患者-看護師関係の長期化に伴う弊害】への視点を持ち、現在の症状や療養環境に対するアセスメントを適切に実施していくことが自殺のリスク判断を可能にすると考えられた。

引用文献

- 厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部 精神・障害保健課(2014)：長期入院精神障害者の地域移行に向けた具体的方策の今後の方向性、
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyo/kyokushougai/hokenfukushibu-Kikakuka/0000051138.pdf>.
- 藤野成美, 脇崎裕子, 岡村仁(2007)：精神科における長期入院患者の苦悩, 日本看護研究学会雑誌, 130, (2)87-95.
- 上野恭子(1999)：精神分裂病患者の長期入院生活における問題, 筑波大学医療技術短期大学部研究報告, 21, 1-7.
- 奥村太志, 渋谷菜穂子(2005)：統合失調症者の「長期入院に関する」認識 - 統合失調症患者の語りを通して, 長期入院への姿勢の構成要素を明確にする -, 日本看護医療学会誌, 7(1)34-43.
- 岩本祐一(2017)：長期入院患者への退院支援における精神科看護師の支援 ~ 精神看護専門看護師の立場から ~, 日本精神保健看護学会誌, 26(2), 21-30.
- 厚生労働省(2017)：患者調査

- <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/index.html>.
- 池淵恵美, 佐藤さやか, 安西信雄(2008): 統合失調症の退院支援を阻む要因について, 精神神経学雑誌, 110(11), 1007-1022.
- YPS Balhara, R Verma(2012): Schizophrenia and Suicide, East Asian Arch Psychiatry, 22, 126-133.
- 上平忠一(2012): 自殺者の実態とその分析に関する一考察, 長野大学紀要, 34(2), 79-92.
- 石井薫, 藤野文代, 木村美智子 他(2016): 長期入院中の統合失調症患者の自己決定を支援する看護, ヒューマンケア研究学会誌, 7(2), 27-34.
- 長田恭子, 長谷川雅美(2013): 自殺企図後のうつ病者の企図前・後における感情および状況の分析, 日本精神保健看護学会誌, 22(1), 1-11.
- 松本俊彦(2016): 言葉にしないが自殺念慮があるように見える, Medicina, 53(12), 1921-1925.
- 佐藤田実(1989): 精神分裂病における挿話性病理現象の症候学について, 精神医学, 31(9), 955-964.
- 安永梨薫(2009): 精神科閉鎖病棟における患者から看護師への暴力の実態とサポート体制, 日本精神保健看護学会誌, 15(1), 96-103.
- 國方弘子, 豊田志保, 矢嶋裕樹 他(2006): 統合失調症患者の精神症状と自尊感情の関連性, 日本保健科学学会誌, 9(1), 30-37.
- 荻野雅, 田代誠(2010): 長期在院精神障害者の退院援助評価スケールの開発と有効性の検証, 日本精神保健看護学会誌, 19(1), 55-62.
- 吉村公一(2013): 退院の意向をもつ長期入院統合失調症患者に対する精神科看護師の「退院調整障壁」- 精神科看護師の態度からの一考察 - . 日本精神保健看護学会誌, 22(1), 12-20.
- 上野恭子, 栗原加代(2005): 入院中の精神疾患患者に対する看護師の認知と専門的ケア行動選択に関する研究, 日本看護研究学会雑誌, 28(1), 73-82.
- 石川かおり, 葛谷玲子(2013): 精神科ニューロングステイ患者を対象とした退院支援における看護師の困難, 岐阜県立看護大学紀要, 13(1), 55-66.
- 山本孝子, 木村美智子(2017): 38年間の入院生活にピリオドを決断した患者の退院意欲と看護師の関わり, 9(1), 69-72.
- 木村克典, 松村人志(2010): 精神科入院病棟に勤務する看護師の諸葛藤が示唆する精神科看護の問題点, 日本看護研究学会雑誌, 33(2), 49-59.

5. 主な発表論文等

[学会発表](計 1 件)

岩本祐一、藤野成美; 退院支援中における慢性期統合失調症患者の突発的な自殺を経験した看護師の気づき、日本看護研究学会 第42回学術集会、2016年8月(茨城)。

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 該当なし

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: 藤野 成美

ローマ字氏名: FUJINO Narumi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。